

儒仏道三教交渉の諸相

共同研究

三教交渉の研究

班長◆ 麥谷邦夫

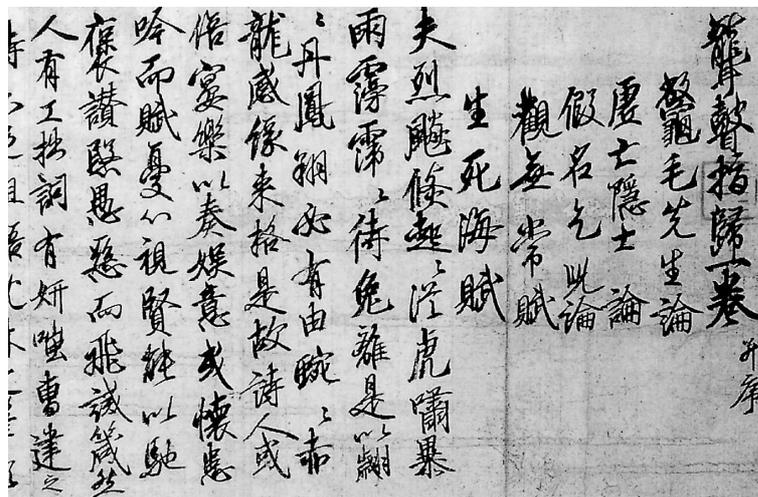
中国には、主要な宗教が五つ存在する。儒教、仏教、道教、回教、キリスト教である。このうち後二者が普及したのはかなり遅いものに対して、前三者は紀元二世紀後半からさまざまな形で互いに交渉をもちつつ、中国の社会や文化に大きな影響を与えてきた。この三者の相互交渉を称して三教交渉という。

儒教は、孔子によってその基礎が確立された先秦諸子百家のひとつ儒家に起源する。儒家はもともと宗教というより学派というべきものであるが、宗族の間の祖先祭祀や天帝信仰を核とする国家祭祀にかかわる儀礼を重視していた。漢代に入ると、専制国家を支えるイデオロギーとしての地位を確立するとともに、国家祭祀の主要な担い手としてその宗教性を強めて儒教と称されるようになった。仏教は、西域や南海を経由して紀元前後に中国に伝播したと推測されている外来宗教であり、中国社会に根つき始めるのは紀元二世紀に入ってからである。道教は、二世紀末に張角や張陵といった民間の宗教指導者を中心に、古代からのさまざまな呪術や民間信仰を核に形成された教団道教と、秦の始皇帝や漢の武帝が熱心に追求した神仙術の流れを汲むものが、やがて仏教の影響下に独自の教理と教団

組織を形成してきたものである。この三者には、仏教が明確な教祖を有するのに対して、儒道二教は明確な教祖をもたず、中国古代の思想・信仰や習俗などをもとに徐々に歴史的に形成されてきたという違いが存在する。

三教の争い

高度の文明社会を築いていた古代中国に、外来宗教である仏教がもたらされたとき、そこにさまざまな摩擦が生ずるのは避けがたいことであった。仏教が当時の中国人に与えた最大の衝撃は、三世応報の輪廻の思想であったといわれる。しかし、より具体的な問題として仏教批判の的とされたのは、僧侶の出家、剃髪^{トリス}の制であった。儒教の教えでは、子の親に対する最大のつとめは、親が生きている間は親への孝養を尽くすことであり、親が死んだ後は祖先としての祭祀を欠かさないことであった。仏教僧侶の出家の制は、親を捨てて顧みず、子孫を残さずに祖先祭祀を絶やすことにほかならないと考えられ、儒教の教えを根本から否定するものと非難されたのである。また、儒教の重要な徳目である「孝」を専らに説く『孝経』の冒頭には、「身体髮膚、之れを父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝



『三教指帰』(後の『三教指帰』)は、龜毛先生、虛亡隱士、仮名乞児がそれぞれ儒道仏を代表して議論を闘わせ、仏教の優位を説き明かす書。若き日の空海の代表作。

の始めなり」とあるように、父母から受けた自己の身体を傷つけないことは、「孝」の第一歩とされる。仏教僧侶の剃髪は制もまた「孝」の徳目を根本から否定するものとみなされたのである。かくして、仏教が中国社会に根つき始め、中国人の僧侶が増えだした魏晋以降、この二点に対する儒教の立場からの激しい攻撃が仏教に加えられるようになる。

さらに、僧侶が日常的に朝廷に出入りするようになると、世俗の権威を認めず仏のみを唯一の帰依対象とする仏教は、僧侶が親や皇帝を拝礼すべきかどうかという問題をめぐって、皇帝を頂点とする儒教国家体制との間で激しい軋轢を生じ、「僧尼不拜君親」の論争を闘わすことになる。また、次第に力をつけ始めた道教の側からは、中華の聖人の教えを信ぜずに、夷狄の教えである仏教を信奉することの非を弾劾する「夷華論」が南斉の顧歡によって著され、仏教徒との間に激しい論争を巻き起こした。この他にも、神（魂魄）の不滅と転生を説く仏教に対して、儒教の立場からそれを否定する范縝の「神滅論」をめぐる「神滅不滅」の論争が著名である。

三教論争の記録

こうした三教の間の論争は、魏晋南北朝から隋唐にかけて何次かの高潮を重ねつつ絶えることなく繰り返されてきた。長期にわたる三教論争の経過を仏教擁護の立場から最初に記録したものは、梁・僧祐の手になる『弘明集』十四巻である。唐代に入ると、道家の祖とされる老子（李耳）と同姓である唐王室は、老子こそみずからの祖先であると唱えて道教庇護の姿勢を見せた。これを契機に、王室の庇護を背景に勢力を拡大しようとする道教側とそれに危機感を募らせた仏教側との間の論争が一気に激しさを増した。そこには、教義に関する真剣な論争から単なる誹謗中傷、揚げ足取りに類するものまで、ありとあらゆる論難が見出される。唐の道宣が、『弘明集』の後を補うものとして『広

弘明集』三十巻と『集古今仏道論衡』四巻を、同じく玄奘が『甄正論』三巻を、同じく法琳が『弁正論』八巻と『破邪論』二巻を編んで仏教擁護の立場を発揚し、この時期の三教論争の様相を伝えているのは、かかる歴史的背景によるものである。これらはいずれも仏教擁護の立場からの偏った記録であるという制約はあるが、今となつては貴重な資料であることに違いない。本研究所における三教交渉の研究はこれらの資料の会読からスタートしたのである。

三教交渉から見えるもの

三教交渉の過程は、互いを非難しあう論争ばかりであったわけではない。とりわけ道教は仏教教理の多大な影響を受けて自己形成を遂げてきたのであるが、仏教もまた儒教や道教の影響を受けて、インド仏教とは似て非なる中国仏教へと変貌してきたのである。この過程で、互いに相手のどのような部分を受容し、どのような部分を受容しなかったのか、その結果、それぞれがどのように変容していったのか。その過程を分析することによって、ふたつの大きな文明それぞれの本質を明かにする手懸りが得られよう。この研究班の目的は、上記の三教論争関係の資料をはじめとするさまざまな資料をもとに、三教交渉の諸相を分析することを通じて、中国の思想・宗教ひいては中国文化そのものの本質がいつどこにあるのかを明かにすることである。このような作業の先には、中国を経由して仏教を受容してきた日本文化の本質もおのずから垣間見えてくるに違いない。本研究所では、これまで長期にわたって『弘明集』や『広弘明集』などの会読を進めてその成果を世に問うてきた。その基礎のうえに、本研究班は少しく目を道教側から見た三教交渉の諸相に転じ、六朝隋唐以降現在に至るまで江南の一大道教聖地であり続けた江蘇省茅山に関わる資料集である元・劉大彬編の『茅山志』、その巻二十以下に載せられた金石資料の会読を進めている。

班員一覧（班長は除く）

●所内

Esposito, M.、金 文京、小南一郎、
佐野誠子、船山 徹、古松崇志

●学内

宇佐美文理（文学研究科・教授）

●学外

吾妻重二（関西大・文・教授）

神塚淑子（名大・文・教授）

亀田勝見（福井県立大・助教授）

巖 善昭（京都府立大・医・非常勤講師）

古勝隆一（千葉大・文・助教授）

坂内栄夫（岐阜大・教育・助教授）

都築晶子（龍谷大・文・教授）

礪波 護（大谷大・文・教授）

深澤一幸（大阪大・言語文化・教授）

松村 巧（和歌山大・教育・教授）

三浦國雄（大阪市立大・文・教授）

藤井京美（京都女子大・文・非常勤講師）

山田 俊（熊本県大・総合文化・教授）

横手 裕（東京大・文・助教授）

秋岡英行

池平紀子

閻 淑珍（京都大・人環・D.C.）

垣内智之

孫 路易

畑 忍（大阪市立大D.C.）

山田明広（関西大・文・D.C.）